

二度の會見

黒田清輝

私が初めて梅先生に會つたのは、巴里の——今でいふ大使館で、其時、先生は里昂りよんの大學を卒業せられた後で、私は巴里の法律専門の大學校へ入る時で有た。

日本でも先生は秀才の譽れのあつた人であるが、此の里昂大學の卒業論文も亦非常な名論且つ長篇で、これのために大に日本學生の名譽を發揮せられたといふ話を聞いて居た後であるから、先生に會つた時、私は非常な景慕の念を以て先生を迎へたのである。従つて其頃法律學に熱中して居た私に取つては、其の印象も一段深かつたのである。

其後私は中道に志を變へて、藝術界の人となつたので、かけ違つて面晤の期もなかつたが、昨年日佛協會の刷新を圖るといふので、招かれて再び先生に會つた。當時先生は専ら同會の事務を執り、山田三良君などと共に之れに執筆して居られた。私は御覽の通りの書生で、同會には入つて居なかつたが、刷新の御相談を受けてからは、會員となり、先生の驥尾に附して、共に同協會の刷新に盡力した。其の御相談を受けた時が、第一回の會見で、先生の御在世中は、



黒田清輝《梅謙次郎肖像》消失

前後たゞ二回の會見にしか止まらぬ。併し先生に對する私の印象は、根強く刻まれて、常に景仰の念を去らなかつた。

今、私は先生の肖像を描いて居るが、パレットに臨む毎に、念々先生に想ひ到り、其の記憶を再現して居るのである。嗚呼、先生は實に謙讓で、且眞面目で、近世稀に見る人であつたものを、實に惜しい事をした。(談)

『読売新聞』明治四四年八月二五日

明治を代表する法学者で、明治四三年八月二五日に死去した梅謙次郎(一八六〇―一九一〇年)の追悼談。『読売新聞』紙上で一周忌に組まれた梅博士追悼記念号に掲載された。梅は明治一八年にヨーロッパへ渡りリヨン大学、およびベルリン大学に学んで、二三年に帰朝。民法・商法両法典の成立に尽力し、また帝国大学での教育のほか、法学の普及発達のため私学経営に力を注ぎ、法政大学の礎を築いた。

黒田が制作した肖像画は東京帝国大学法学部の所蔵となつたが、関東大震災により失われた。ここに紹介する図版は、昭和一八年に美術研究所(現東京文化財研究所)が梅家の所蔵する写真から複写した写真資料による。